

# 新しい授業づくりの文化を創る

第7号

令和4年9月26日「能力ベースの授業づくり実践講座」教材研究会

能力ベース授業づくり実践講座は、教材研究会と授業研究会をセットにして実施します。今回は、4回目の教材研究会です。中学校3年生 国語の「読むこと」領域で、魯迅の「故郷」を題材に、訳文の「比較読み」をした上で、「故郷の魅力伝える批評文を書く」という提案です。回を重ねるごとに先生方も徐々にお互いの顔と名前が一致するようになり、提案に対して白熱した議論が展開されました。



研究授業 第3学年 国語「故郷」 授業者 増山 明日香 教諭(吹田市立西山田中学校)

## 授業者の提案

### 【WHY なぜ「故郷」を学ぶのか？】

#### 生徒は何ができるようになるのか？

学習指導要領において、「C読むこと」の領域では、三年時に『文章を「批判的に」読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えること』とある。生徒は「故郷」に描かれている身分の格差や当時の時代背景、登場人物の心の葛藤を文章から読み取る。言語活動を通して、文章に書かれていることをそのまま受け入れるのではなく、吟味したり、検討したりしながら読むことができる力を身に付けることを期待し、本単元を創った。

### 【WHAT「故郷」で何を学ぶのか？】

「把握」「精査・解釈」「形成・共有」という学習過程を、単元を通して描くとともに、1時間の授業の中でもその学習過程を描く。

単元の中でスパイラルに学習過程を経験することで、そのプロセス自体を能力として身につけ、何度も文章や自分の考えを吟味することができるため、批判的に読むことを学べると考えている。

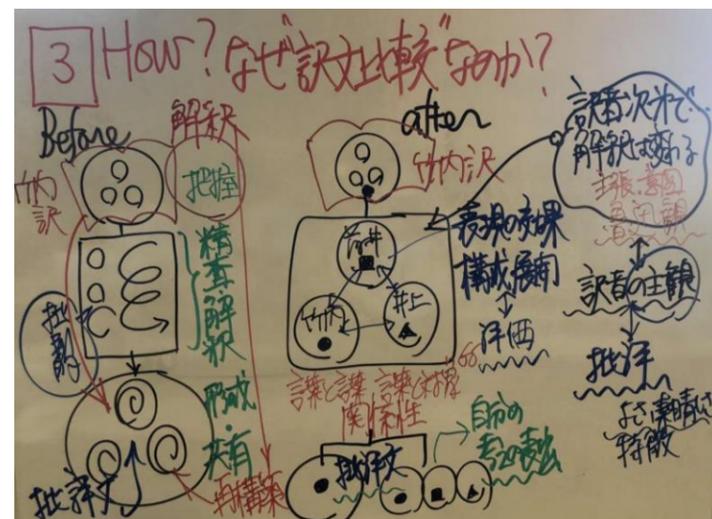
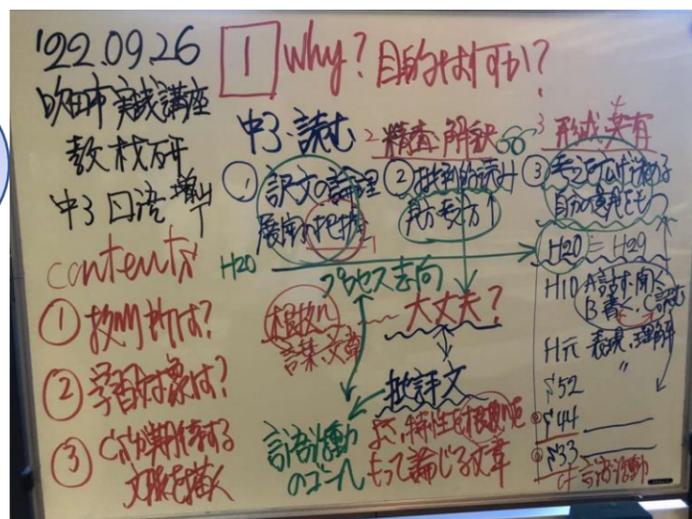
### 【HOW どのように「故郷」を学ぶのか？】

本単元での言語活動のゴールは、「故郷」の「魅力」を伝える批評文を書くことである。そのために、教科書に掲載されている訳文(竹内訳)と、他の訳者が書いた訳文(藤井訳)を比較読みする。2つの訳文における表現の仕方、人間関係や情景描写の描かれ方の違いを読み比べることで、「故郷」の魅力についての自分の考えを形成し、批評文として表現させたい。

<論点①>「批判的に読むこと」が単元や本時に位置付けられているか。

<論点②> 比較読みが批評文を支えるものとなっているか。

齊藤先生から



### 目的は何か？

現行学習指導要領では「批判的な読み」がクローズアップされた。なぜ「批判的な読み」をしないといけないのか。「本当にその読みで大丈夫か。あなたのその読みで、その解釈で本当に大丈夫と言えるかどうか」。自分の主張を相手に伝えるためには根拠が必要。その根拠を、国語の場合は言葉や叙述といった文章に求める。批評文を書くということは、ある意味根拠を明らかにしながらクリティカルに読んでいるかどうかということ。批評文を通して自分の考え方を表現できる子供を育てることが重要。

### WHYの視点

### 何を学習対象とするか？

今回の提案では、批評文を書くことを言語活動のゴールとしている。何を批評するかというと、訳文に対する批評。しかし、一つの訳文だけでは、その良さや特性は見えてこない。そこで、複数の訳文の比較読みをすることによって、それぞれの訳文において、魯迅のもの見方、考え方がどのように表現されているのか、そして、どの表現が自分の中でしっかり来るのか、表現の効果を考えることが大切。ただし、批評文を書くための比較読みをするにあたっては、その前提として、まず、竹内訳の「故郷」に対する自分の読みが非常に重要となる。

### WHATの視点

### なぜ訳文比較なのか？

「把握」で物語の全体を捉え、「精査・解釈」で批判的な読みをする。「形成」では、個々が主観を入れて解釈し、「共有」では、様々な解釈に触れることで、自分の解釈の幅を広げたり深めたりし、個の中の多様性を伸ばす。これらのプロセスを通して、最初の「把握」における解釈が、再構築される。これが国語の見方・考え方の成長。このプロセスにおいて訳文比較をすることで、訳者の主張や魯迅観が見えてくる。それらを批評することが、訳文の良さ、素晴らしさ、特徴に対する批評となる。

### HOWの視点

### 【受講者の声】

- ・翻訳文学特有の訳者の読みを比較するという提案、とてもおもしろいと思いました。訳者の主観を子どもたちが読みとることができたら、「故郷」の読みも深まるように思います。楽しみです。(N先生)
- ・今日は国語でしたが、自身の体育にも通じる考え方がいくつかあった。「本当にそれで大丈夫なのか？」この問いを持つ生徒を育てたい。(F先生)
- ・単元の作り方やそれを支える活動を考える視点を自分の教科に置きかえて改めて考えていこうと思いました。(S先生)

### 【編集後記】

回を重ねるごとに、受講者の校種・教科を越えて対話する意識が向上していると感じる。中学校籍の私は、小学校や中学校の他教科の授業について考えることが、こんなにも楽しいものであるのかと実感している。一人ひとりの積極的な授業改善がやがて吹田に「授業づくりの文化」を根付かせる。各教科・各単元で子どもが身に付けるべき資質・能力について対話を通してみんなで考える「能力ベースの授業づくり実践講座」にぜひご参加ください。

(文責:教育センター 中野)